

菅原正子著

『日本中世の学問と教育』

(同成社中世史選書 15)

同成社 二〇一四・八刊
A5 二五〇頁 六〇〇〇円

近年、教育史分野では前近代のリテラシー研究が、国文学分野では雑書や知のネットワークをめぐる議論が盛んである。本書はこうした動向とも密接に関連するが、「家」や生活文化を専門とする歴史家の手によるだけに、常に教育と生活・職掌との具体的関連に注意が払われている点、また各階層ごとの差異が論じられている点など、前二分野の論考とは一線を画する内容となっている。

第I部第一章「中世日本人のリテラシー」では、読み書きをめぐる意識、およびイエズス会による教育と布教の関係を論じる。第二章「興福寺多聞院と庶民の子供たち」では寺院における手習い学習者と使用人の区別について、第三章「毛利氏家臣玉木吉保の学習」では武士の学習内容とその意義について論じる。

第II部第一章「天皇の学問と侍読」では、天皇の学問と政治との関係、および学問分野の変化を論じる。第二章「足利学校の学問と教育」では、足利学校での教授内容、特に易学について述べる。

第III部は貴族たちの学習を扱っており、第一章「公家社会の教養と書籍」では、日記に見える書目の分析から中世公家の文化傾

向について論じる。第二章「三条西公条と学問」は漢籍学習の傾向と五山の影響について述べている。第三章「女官・女房たちの学習・読書」では、女官・上流貴族女性と諸大夫・侍クラスの女房達とで読書傾向の差があったことを指摘する。

第IV部は絵画史料と学習との関わりを扱う。第一章「後花園天皇の学習と絵巻物愛好」では貞成親王と後花園天皇の間でなされた和書・絵巻物のやり取りと、同天皇の画業について述べる。第二章「公家の日記にみえるお伽草子」では、身分・社会階層によってお伽草子享受のあり方が異なることを指摘する。第三章「学習書としてのお伽草子」では、『玉藻前物語』が楽書に基づいていることを指摘し、学習書としての機能を論ずる。

以上のように、本書が扱う階層は極めて幅が広い。「教育や学問は、人間・社会・文化等を根底から支える」という著者の言葉通り、本書では中世社会そのものの再生産が描かれているといつてよい。したがって、本書の影響もまた、広範な分野に及び得る。

文化史への影響は言うまでもなく多大である。本書では、新旧の学問や古典文化、新興文化が、どの階層によって担われていたのかを精細に跡付けており、芳賀幸四郎を始めとする通説の再検討が図られている。特に、新興文化を柔軟に取り入れる天皇・公家の姿を活写した点は、室町・戦国期の文化史をめぐる近年の動向と響き合う成果と言える。

また、リテラシーの問題は文献史学にとって極めて重要である。ある史料の成立圏や享受圏をどこに設定するかによって、史料の性格は異なった解釈を生む。その点で、本書が女性や庶民といつ

た把握困難な層にまで論及している点は大きな意味を持つだろう。
個人や社会は学びによって形成される。その動態性に気付かせ
てくれる一冊である。是非一読を勧めたい。

(辻 浩和)